

ライフケアガーデン湘南 5階(看護)

症例概要 利用者氏名：60代 女性 要介護1

利用期間：2025年5月 ～ 8月現在

経過：小学校で勤務し副校長を5年務め、65歳で夫婦の故郷へ帰郷し畑作業をする計画をしていた。大工の学校へ入学したが、進むにつれて実技が難しくなり不安定な状況が続いた。そんな中で2024年11月に大工の学校の修学旅行に参加した時にトイレの場所や時間などで不安なことがあり落ち着かなくなってしまった。このことが引き金となり精神的に急激に不安定になり卒業まで4か月であったが、不安材料を取り除くために同年11月末に大工の学校は退学した。便秘で通院していたクリニックや心療内科・鍼灸へも通院していた。パーキンソン病の診断がつき内服薬で治療を行ったが、食欲は回復せずに寝たきりで過ごす事が多かった。2025年5月に入居後、多職種で連携し家族とも関わりをもち、親身な対応を行った結果、見違えるほど明るく過ごせるようになった事例

内 容

入居時より活動量が乏しく覚醒時間が少なくほぼベッド上で過ごしていた。まれに覚醒する際は夜間帯が多く、ナースコールを押したり掛け布団をかけ直したりする様子もみられていた。幻視はないが夢で大声を出したり歌を歌ったりと夢と現実が一緒になっている様子もみられた。食事は定時で摂取できることは少なかった。パーキンソン病の時間薬は覚醒状態が悪く内服できないことも多かった。声掛けに頷きはするがそれ以上の反応がなく昼食時になっても水分摂取されない場合はご家族に連絡をとり協力していただく事もあった。

入居して2週間後の往診で症状や日々の過ごし方からパーキンソン症候群でレビー小体型認知症ではないかと診断される。往診医よりキーパーソンの夫へ、症状や経過から軌道修正の為の内服調整が必要である旨を説明し承諾を得る。それ以降は内服調整のため往診医とは密に連携を図った。症状変化があった際は電話にて報告した。往診は内服調整の間は週に1回となった。その都度内服薬の指示があり薬剤師の協力を得ながら正しく与薬を行った。

内服薬調整を行ってから徐々に活動量の増加がみられるようになった。朝起床できるようになって自室で整容する姿があった。食事はミキサー食で介護職が介助していたが嚥下良好になった為、常食一口大食へ変更し自己摂取出来るようになった。

入居から自室での食事摂取であったが体調が良い日はデイルームで摂取されることもあり最近では毎食デイルームで召し上がっている。排泄はパッド交換が多かったが、最近ではトイレを使用し布パンツを装

着している。リハビリ介入は、当初自力体位変換も難しかったが、徐々に座位保持、介護歩行と行動範囲を拡大していった。7月に入る頃には室内フリーハンド歩行や室外歩行ができるようになった。家族とボール投げを笑顔でされている様子もみる事ができた。

今回、多職種が関わることで活動量が増加し日常生活動作を拡大することができた。入居当初はベッド上で閉眼し顔くが会話はしないという状態でコミュニケーションを図ることは大変難しかった。食事や内服薬を勧めても拒否されたり、入眠したまま覚醒せず受け入れられない状態であった。日々の様子を介護士が把握し、必要なところを医師へ報告し内服薬の調整が必要な際は、薬剤師へ調剤依頼をした。食事内容は栄養士と相談をし形態UPとなった。理学療法士は、日々の状態に合わせて安全に楽しく過ごせるメニューを行った。

ご本人が笑顔で過ごされる様子を見てみると「輝きの一日」を提供できたのではないかと考える。今後も継続して援助を行っていきたい。